



世界圖並に南蠻人
渡來圖屏風に就て

堺市史編輯長 牧野信之助

緒言

私は「世界圖並に南蠻人渡來圖屏風に就て」といふ題目で、暫く御清聴を煩はしたいと存じます。足利の末期に開始せられました所謂南蠻諸國との交通は、通商および宗教の兩方面に涉りまして、寛永の鎖國になりますまでザツミ百年の間、日本人の從來未だ曾て知らなかつたところの、多くの新らしき文物を將來いたしまして、各方面に頗る大きな影響を與へてをります。今この時期におきまして、南蠻交通の最も興味ある記念品であると思はれますところの、残されたる世界圖並びに南蠻人渡來圖屏風を選んで、それについて少しく自分の所見を申述べて見たいと存じます。

元來遠物を愛好するといふことは、人類共通の心理状態ではありますが、特にこの時代にありましては、その受入れたところの異國文化が、日本人にミつて全く未知清新のものであつただけに、一層その影響は深かつたと思ふのであります。その時代の統率者である織田信長にいたしましても、豊臣秀吉にいたしましても、この二人なごはいづれもその傳記を讀んで見ますと、度々宣教師を引見致しまして、海外文物の状況を詳しく問ひ尋ねてをり、珍らしい舶來品を非常に愛玩してをります。さういふことはもう靡々色々の書物に紹介せられてをりますから、今別段くどくしく申すまでもないことでございます。

世界圖屏風

世界圖の初見

其等の一つミ致しまして、これから主題の世界圖屏風から申上げますと、元來所謂世界圖屏風の元を造つてをりますところの世界地圖は一體さういふ順序をもつて、日本に入つて來たかといふことを調べて見ますと、信長の時代には記録の上から申しますと、未だ渡來してゐたミ云ふ十分の證據が見えてゐないので、信長自身も從つて之を見てはゐないと思はれるのであります。然し秀吉になりますと、これはいづれ先晩新村先生のお話にもあつたこと、存じますが、天正十八年にこれより先き九州のキリシタン大名達がローマに遣はした使節、伊東滿所等がらやうき歸つて來て、京都の聚樂邸で秀吉に謁見し色々の歸朝土産を獻上してゐる中に、世界圖が交つて居ります。これによつて見まして

も、秀吉は必らず世界圖を知り、またこれを見てゐたに相違ないと思ふのであります。一體ヨーロッパ殊に葡萄牙、西班牙の兩國にありましては、かのバスコダガマ Vasco da Gama のインド廻航以來、東南洋方面の交通が頗る頻繁になりまして、従つてその注意が著しくこの東洋及び南洋方面に注がれた結果こゝして段々正確な地圖なごも出版されることになり、一千五百七十年即ち我が元龜元年にはオルテリウス Ortelius によつて劃期的の世界地圖が版行されてをります。即ち秀吉の時代には十分に此等の地圖は、日本に転載することの出来た筈になつてをります。たゞ非常に惜しいと思はねますのは、滿所等によつて秀吉に獻上されたこゝいふ地圖は、今は少しも残つてをる痕跡がございせんので、果してそれはオルテリウスのものであつたかごうか何ごも云はれませぬ。たゞ世界地圖がその手に渡されたこゝいふことだけであります。こゝころが秀吉の後に政權をこつた徳川家康の時代になりますご、此時はもうよはご歳月が推移してをるのみならず、だんごご時局も變遷して、國家の統一が十分に出来てをり、その上に家康は御承知の如く非常に力を對外政策に注ぎ、その方面には頗る興味を持つてをつたのでありますから、その晩年駿府において所謂大御所の時代——江戸には秀忠將軍が徳川の屋台を細いでをるけれども、自分は駿府にをつて隱居政治をやつて實權を握つてゐた——その時代には、海外の事情に精通した人々、例へばウィリアム・アダムス William Adams なごをしばご引見して、海外の事情を詳しく尋ねてをります。又珍らしい外國の貨物を或は貿易品によつて、或は獻上品によつていろいろご蒐集愛藏してをりました。それで元和二年四月駿府城に薨去の後、その夥しき遺品を處分の爲め一々書き留めた帳簿があります。それによりますご随分いろいろのものが見えて居ります。何しろ當時の家康は武家の頭目であつたのみならず、また日本一の金持ごいつてもよいので——その當時は未だ三井、鴻池なごはそれ程富豪にはなつてゐせんから——武力の實權をもつてをつたご同時にまた金力の頭目でもあつた。殊に當時盛んに開發せられ出した金銀鑛山、例へば佐渡の金山、石見銀山なごを例の大久保長安なごを使つて採掘し、盛んに貨幣を鑄造せしめたのでありますして、従つて家康の遺品中には金銀貨は實に澤山殘されてゐます。のみならずまた其等の帳簿を一々繰つて見ますご、實に驚くはご澤山の數でもつて或は支那、インド支那、

南洋諸島、南蠻諸國の貨物が列記せられてをります。その中即ち「駿府御分物之内色々御道具帳」の中に、「一、南蠻王之繪圖一幅」もあるものと相並んで「一、世界之圖三幅」も記され、終りに「右御道具何枚相取請取所如件。元和四年午十一月朔日肥田孫三郎。（以下二名略）山下信濃守殿」もあるものがあります。これによつて家康の遺愛品の中には世界地圖が而も三幅確かにあつたといふことがわかるのであります。處がそれ許りではございません、その幾去以前に例の駿府記といふ――慶長十六年から元和二年に至る駿府に於けるいろいろの事件を書き留めたものがありまして、即ち家康の駿府時代の日記にも見るべきもので正確な史料と思はれるのであります。その中に慶長十六年九月二十日の條を繰つて見ます。――「南蠻世界圖有御覽、而及異城國々之御沙汰後藤少三郎（光次）、長谷川左兵衛（藤廣）、候御前。」とありまして家康が世界圖を展げて見てをつた、さうして外國の國々のことについていろいろお話があつた、その時にはお氣に入りの後藤、長谷川なごをつた、この二人は外國向の事件について始終相談相手になつて居つた人であります。かういふ風に對外政治家としての家康の面目を示すにはこれは面白い材料になつてをります。幕末になりまして幕府の書類を整理した御書物奉行の近藤守重は、御代々文事表といふものを書き、その中に今の個所を拔萃して、そこへ自分の案を附け加へて「これ萬國圖の日記に見えし始なり」とかう書いてをります。即ち近藤守重の解釋によりまして、世界圖が日記に見えてをるのはこれが始めである、即ち慶長十六年九月に家康が見たのが始めだといつてをるのであります。かく考へますと、家康の駿府時代即ち慶長の末年には、外國の船に載せられて持つて來たものであるか、又は日本人の手によつて撰寫されたものであるかは、遽かに判斷することは出来ないにしても、ともかくこの世界圖といふものが家康の座右にあつて、家康はそれによつて海外の形勢を知るよすがにしてゐたものであるといふことは、十分に知るべきことが出来るのであります。かくの如く致しまして、またこの世界圖を今度は屏風に仕立てたものが、大體この時代頃から頗る行はれてをつたと思はれるのであります。世間によくこれを傳へてゐるものがあるのであります。この圖がさういふ風にして残つてゐるかといふことについては、私は以前から少しく調べたのでありますが、恰度取り混せて十二、三種ばかりになりました。今

話しの順序としてそれを一々列挙して見たいと思ひます。多分これは今も猶餘り所有主が變つて居らないだらうと存じます。

世界圖屏風の所在

先づ第一に福井市の淨得寺に傳はつてある國寶の世界圖屏風があります。これは日本圖一しよになつてをりまして、寺傳では狩野永徳の筆といひ、その裾のところに永徳常用の垂朱印が押されてあります。第二には若狹小濱町の河村氏に、やはり日本圖一しよになつたものを持つてをります。第三には同じ小濱の町外れでありますが今富村發心寺に日本圖共に一雙になつて傳へて居り、是は幸ひ會場に參つてをります。第四には能登の鳳至郡門前總持寺の別院——總持寺は今は神奈川縣の鶴見に移轉されて居りますが——あそこに一つの圖幅があります。是は屏風ではなく、佛説の言葉をつつて「南瞻部世界圖」と題してゐる圖幅であります。その次が東京市本所區の北村家に、日本圖一しよに卷子として持つてをるものがあります。これは元來徳川三代將軍家光が枕屏風に使つてをつたといふ傳へがありましてそれを後に卷物にしたといはれてをります。第六には堺市の山本氏所藏のもの、之には日本圖はなくて世界圖片雙だけあります。猶亦同じ堺市の河盛氏にも、日本圖一しよになつたものを持つてをられ、それから會場に出てをりますが、東京市の益田男爵がやはり日本圖一しよになつたものを持つてをられ、また滋賀縣長濱町の下郷共濟文庫に、やはり日本圖一しよになつたものがあり、それから東京市の落合氏は世界圖片雙を、佐藤氏は對雙を持つてをられるといふことであり、猶またこの大阪朝日新聞社にも先年世界圖を入手せられたさうで會場に出て居ります。

概観

ざつと以上十二、三種を大體私は見てをりますが、寸法とか所有者の所書きなどは煩雜ですから一々申しません。猶此等の中には、唯今申上げましたやうに、必らずしも屏風になつてゐないものもありますけれども、假りにこれと同じ型のものとして考へて見る時には、先づ第一に圖様がほとんど同一型式になつて居ることに氣がつかます。然しもさういふことは版本ではございません、皆んな描いたものでありますから、精しいものもあり粗雑なものもあり、大きいものあれば小さいものもあり、或は巧緻なものあれば、拙劣なもの、華麗を極めたものあれば素朴なものもありまし

て一樣ではありませんが、これを通じて見ますと非常な差異はなく、系統的に申しますと、殆んど同一の製作物であるといふ前提の下に考察せられてよいと存じます。

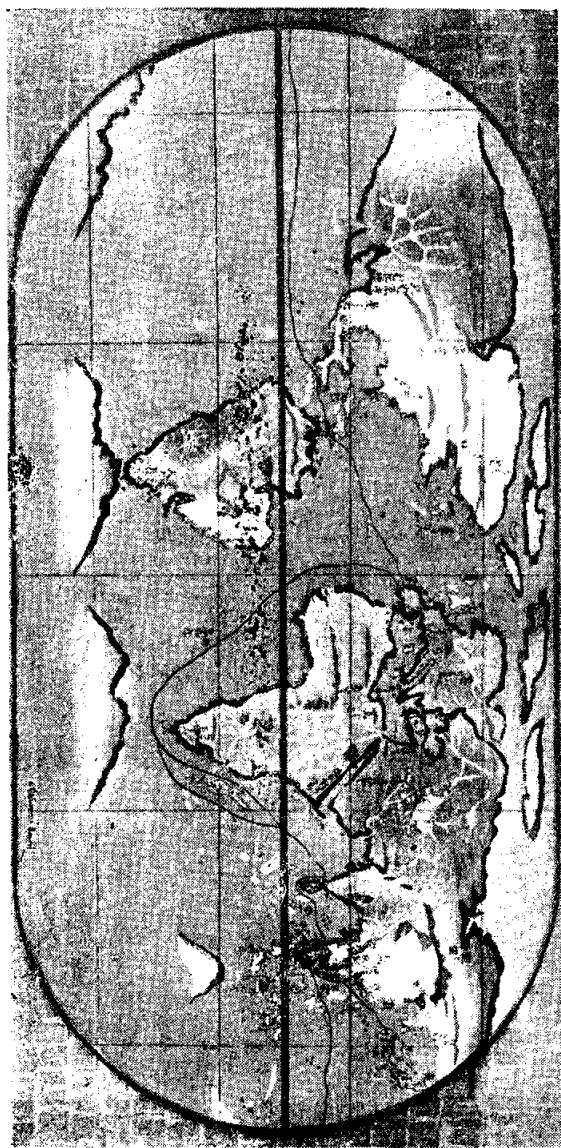
こゝに出しました屏風（堺市山本氏所蔵のもの）を御覧になつても判ると思ひますが、これらは今日われゝが習熟してゐる意味の地圖といふものではないので、著しく裝飾的の要素をもつた繪圖面であります。即ちこれ一つには時代の好尚と製圖上の發達の上から、當代にあつてはこの程度でかういふ趣向の下に、實用と裝飾と相半ばするものを作つてをつたのであります。國寶福井市淨得寺の屏風の如き、もしくは會場にあります益田男爵のもの、或は家光將軍が枕屏風に使つてゐたといふ北村氏のものなどは、別けてもさうであります。非常に裝飾的の分子に富んでをりまして、裝飾的のもの、代表させらるべきものであります。これとよい對照を示してゐる堺市の山本氏の屏風の如き、これはごちらから申すに、寧ろ實用を主としたものといふとが出来ると思ひます。その證據には先づ畫面において、斯の淨得寺の屏風に見る如き、華麗を極めた南蠻船も描いてはなく、或はまた燦爛たる黄金をもつてあちこちに雲を飛ばしてをるところもなく、たゞ圓形のまゝに展べ描きにしてあり、殊に面白いのは、當時の航海路を他の屏風では、線路だけは先づ似たり寄つたり大した違ひもなく書き入れて居りまするし、或はまた船を幾つか書きならべて、この邊は南蠻船が行くのだといふことを示してありますが、山本氏のあの屏風はさうてはなく、航路を割合に正確に描いてありますので、殊に注意しなければならぬことは、往復路を區別してあることでありまして、それを非常に詳しく記してあります。即ち行くといふしるしがあつて、ボルトギス即ち南蠻の本國ボルトガルから出て居る線路は、大西洋を横ぎりアフリカの南端を廻つてモザンビーク——今のモザンビーク——インドのゴア、天河、肥前といふやうになつてをり、即ち西洋から日本へ来るころの道であり、歸るといふしるしには呂宋——呂宋は一つの根據地でありましたから——呂宋から太平洋をすつと通つてノベスピニヤ即ちニューイスパニヤ、それからアカプルコ及びペラクルーズといふやうに道が描いてある。そしてもう一つ行くといふ道があつて、それはボルトギスを出まして大西洋へ出てそれからノベスピニヤ——アメリカの方へ廻りまして——呂

(藏所氏本古本) 三第 風 屏 圖 界 三 圖 一 第



宋へ行つて肥前、薩摩といふやうに道がつけてあります。薩摩はちよつと場所はずつとありますが、畫面も狭いこゝで
ありますから、キツミ薩摩の何處といふことを當てにしたものでもあらまいと思ひます。それがもう一つの日本へ行く道
であつた。それに對して、歸る道はインドのツウラン、サント・ヘレシナ即ちセントヘレナそれからポルトギス即ちサンル

カ
の港へ、かういふ風になつてをります。これは屏風の世界圖にしましては、非常に詳しい例でありまして、私はこの意味から、これはむしろ實用に——今日の學校の教室などに使ふのに、同じやうな目的にも供せられたものではないかといふ風に考へるのであります。



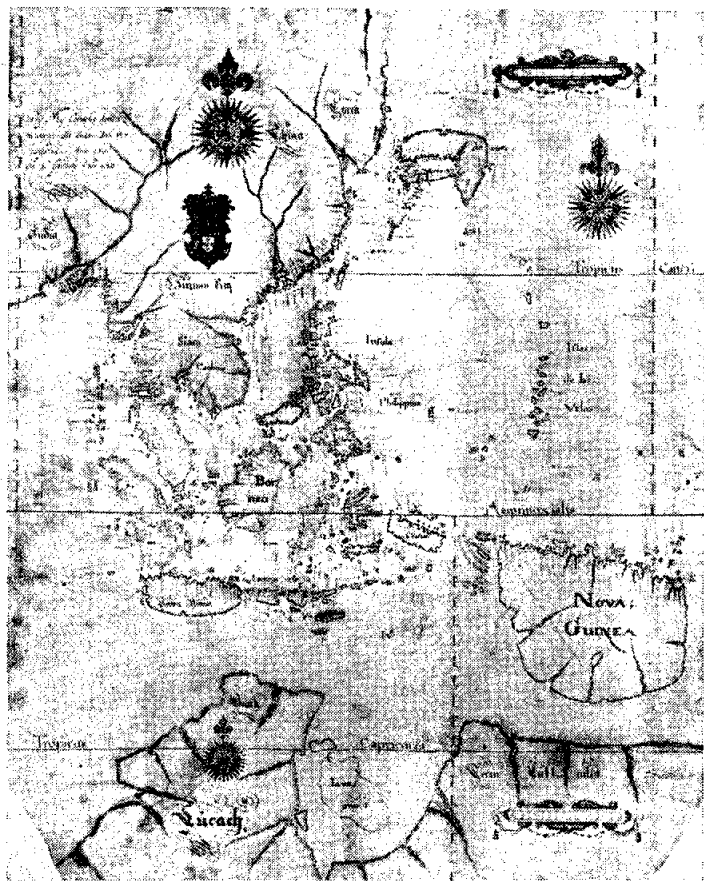
(藏所寺得淨 市井編) 風 屏 圖 界 世 圖 二 第

俗稱つて全體として裝飾に流れてをる屏風の、裝飾的分子は一體きんものであるが、益田男爵の小型の屏風でも一端は判るやうであります。淨得寺のもものがつよく判ります。淨得寺のものに據つて考へて見ますと、到るころに濃厚な實に立派な黄金色の雲形が描かれてをり、それから青緑の如何にも塗り立てたやうな山脈なごが重んでをり、或は白の方形の都城、それから紺青色をしたころの太い水の流れ、或は五彩を鏤めた南蠻船、これらが如何にも當時における一つの最高の技術になつてゐることを示してをります。しかしそれにしても、それは安土桃山時代から江戸時代にかけて流行しました、金碧濃彩の屏風畫の一つの亜流といふ風に見るべきもので、それが如何に裝飾に流れてをつたにしたころで、根本に示すころは矢張り地圖であつて、裝飾的分子ばかりで見ることは出来ません。

筆者 またその裝飾的分子から、さういふ畫家の手になつたかといふことは到底判りませんが、唯一の手掛りは前述しました淨得寺の屏風の裾にある永徳の龜朱印であります。それはちやんこ普通の型式を踏んで正しく押されてあります。けれどもよく考へて見ますと、永徳は普通の説例へば本朝畫史などでは天正十八年には亡くなつてをるのでありまして、この屏風が天正十八年以前に出来たといふことになれば兎も角、さう考へて見ても後説さる如く、天正時代を持つて行くものではありませんから、永徳の龜朱印は押してあるけれども信するに足らないのであります。然しまた一面から考へますと、この十幾種の屏風畫は、それを見ましても日本人の手によつて描かれたといふことに至つては疑ひのないことで、それは運筆の上からも或は筆勢からもいふことが出来ます。もつとも朝日新聞の持つてをられるあの圖については別に考へがござりますが、その他は總て日本人の手によつて作られたといふことがいへます。

圖式系統(李瑪璽圖と航海圖) さて日本人の手によつて作られたとするならば、何かその原本がなくてはならない。原本なしにさういふものが日本人に描寫せられるはずがない。そこで一番先に我々の考へに出て来るのは西暦一千六百二年萬曆三十年我が慶長七年——に支那の北京で刊行せられた世界圖、有名な李瑪璽 Matteo Ricci が坤輿萬國地圖といふものを刊行してをります。これはその當時において、世界圖の一つのオーソリティーになつたもので、これを屏風圖の中にあ

るころの山脈の書き方、或は川の流れ方、或は湖沼の位置、或は島嶼の位置、都城の形、さういふものが、よほどよく合致してゐるのであります。たゞ一つその地圖だけで隨に落ちないとは、かの南洋方面、即ち今日の印度支那あたりから南洋諸島へかけて、この方面の部分が餘程違つてゐて、さうしても李瑪竇の地圖の外に、使つたころの何か種本がなくはないならぬといふことになるのであります。そこでもう一つの種本になるらしいものは、何であるかを詮索して見ますと、これはさうしてもその當時、ヨーロッパにおいて作られた世界圖、或はまたその作られた世界圖と密接な關係を持つてゐる航海圖を、當てなくてはならないことになります。ヨーロッパではポルトガル、スペイン人が十五世紀末に印度方面へ廻航しまして以來——從來はたゞもう東洋方面の地圖に申しますと、マルコポーロの話で御承知でありませうが、想像だけで書いてをつた部分が多かつたので、一向東洋殊に印度支那方面の本當の格好が地圖に出てをらなかつた——ころがだん／＼交通が頻繁になるに従つて、その必要に迫られて航海圖が完成せられ、地圖も矢張り一歩々々正確になつてまゐりまして、前記の如く西曆一千五百七十年即ち日本の元龜元年に作られたオルテリウスの世界圖の如きは、印度支那及び南洋方面の地形輪廓が、よほど正確になつて參りました。其後引つゞいて一千五百九十六年、我が慶長元年にオランダ人のリンスホーテン *Linshoten* によつてその地圖が出版せられ、其後亦三年遅れてロンドンで作られた有名な世界地圖（フアクシミルアトラス中に收めてあります）かういふものになります。こゝで完全になつてをります。ころが屏風の世界圖の東南洋の部分は、さうしてもかういふものによつて作られてをるこゝに解釋せられるのであります。それは第一番に、さういふ地圖が出来るまでに、實際に使用されてゐた航海圖を考へて見る必要があります。この會場にも航海圖はいろいろ出品されてをります。或は長崎から或は伊勢から、或はまた當地平野の末吉家から出されたものもあつて、それらを見ますと、今いつたロンドンおよびオランダで出された地圖の部分とよほどよく合つてをります——第二會場から第一會場へ来る廊下のガラス戸棚の中に、東京帝室博物館から出品された南洋鐵路圖といふのがあります。これは航海圖の中でも一つの權威になるもので、一千五百九十八年即ち慶長三年にオランダのエダム *Edam* で作られ、前述諸種



(藏所館物博皇帝京東) 圖 路 航 洋 南 圖 三 第

の航海圖と同一系統のものであります。しかして同時にまたさういふものが、世界地圖の一部に利用せられて出版せられた、かういふ關係になります。

萬里 ミミロが

それでは屏風の世界圖が、この航海圖を利用して作られたと思はれるのは、ミミロが一番動かぬ證據になるか、

—— 今一々詳しく考證的に申上げますと無味乾燥になります。それらの中で、一つ面白い例があります。

即ち博物館の南洋航路圖をよく御覽になります。支那の廣州の南の方印度支那の南東の洋中に、奇妙な記號があり

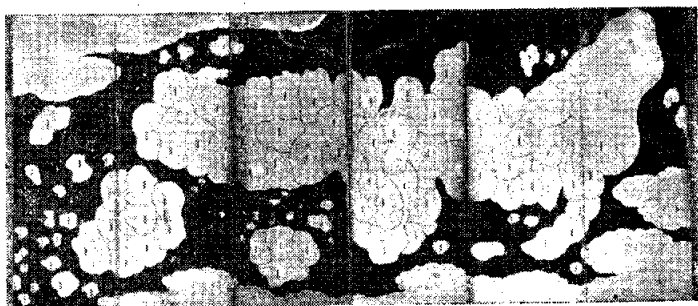
ましてプロ・ツ・カムビル、プロ・バラセル puto de Cumbri puto paracer を記入されて居ります。そうして平野の末吉家所蔵のものを見ても、或は伊勢角屋のものを見ても、或はまたこの屏風を見ても、あゝいふ風な記號があつて、それに名前がちやんと記されてあります。それはいろいろになつてをりますが、一番簡單なのは萬里ミ書いてある。或はこれを萬里ヶ瀬、萬里石塘とも記して、これもかくそこに一つの暗礁があるといふことを示してゐるので、非常に廣大な面積に互つてゐるから、萬里といふたのであります。同時にまた一方日本において、その當時の非常に詳しい實際の航海記があります。京都大學の圖書館にある元和航海記といふ本で、新村博士の編輯された海表叢書中にも採録されてありますが、それは多分寛永初年に出来たものでありませう、その中にシヤムから日本への航路「シヤムラウよりの乗前」の條下に、この地點の非常に詳しい記事が見えてをります、またそれは支那の書物、例へば清の藩鼎珪の安南紀略にもその實地を記し或はまた日本でも時代は少し遅れますが、新井白石の采覽異言の中にも、亦イラステフクモル萬里石塘ミ名つくミして紹介してをります。其等を讀んで見ますと、疑もなくそれは非常に大きな珊瑚礁でありまして、北緯十五度から二十度、東經百十度乃至百十五度に互つてをりまして、そこへ船が乗りかゝるミきつミ難破するミいふ恐ろしい箇所で、その航海圖は航海者が實際そこで困るのであるから、そのミころは非常に詳しく記事にも書き、地圖にも現はして、どんな者でもこの邊のミこが詳しく判るやうにしたのであります。ミころがそれは李瑪寶の地圖にはない。ないはずで、即ちそれはかういふ部分には觸れるミこなしに作られたものであるから、當然無いのであります。しかし屏風圖にそれがあるのを見ますと、屏風圖の原本はいづれも、この部分は航海圖か、又はその航海圖によつて作られたヨーロッパの地圖に、よつたものといへるミ考へるのであります。でありますから、最小限度にいつても屏風圖の中には、以上三種以上の地圖が融合して出来てをると、解釋するミが出来やうと思ひます。斯してまた、その原作圖はおそらく日本人の手によつては、李瑪寶の萬國坤輿地圖ミ外國出版の地圖ミをこね合せて、屏風にあるやうなものを初めから作るミは出来ませう。あゝ、いふ圖は日本人によつて描かれてをりますが、その原稿は最初歐羅巴人によつて描かれ、それを日本人が實用的に、或は

またウシミ裝飾的に描いたのであらう、ミ私は考へるのであります。

また次ぎには、それに記入されてゐる地名を見ますミ、よほミ興味があります。その地名は大體は翻譯でありまして向ふの人が書いた言葉の色々ミ訛を入れてをりますミ。ミころがそれが頗る日本化されて書いてある場所があります。例へば淨得寺の分を見ますミ、北滿洲は饒祖ミ書いてあり、韓半島は高麗、また朝鮮のずつミ北の方は元良哈、また台灣は高砂、マカオは天河ミ日本流に書き、また占城のミころに「佛羅名所占城」ミいふミを書いてあり、それから李瑪竇の地圖を翻譯したに相違ないミ思はれる一證には、南アメリカの南端バタゴニアのミころに「ばたこぬ人人の長一丈二尺」ミありまして、之は李瑪竇の地圖に書いてあるのを、そのまゝ日本流に譯してあります。だから地名などを見ましても、矢張り日本人が慣用してをつたものが書いてあるミからして、邦人の手でもつて李瑪竇の地圖を譯したのであるミいふミころが判るのであります。

日本圖との關係

それから前に十餘種の屏風圖目錄を述べ上げました時に、大體屏風圖は何れも日本圖ミ世界圖が一對になつてをるものが、普通だミ申しましたが、それは一體ミうした譯であるかミ申しますミ、その日本圖ミの關係から少しく申して見ますミ、遙かに後の時代になつて日本圖をこしらへて、食つ附けたのではないかミいふ考へもないではございせんが、しかしこれはミうしても同時代に一對に作られたものだミいふ方が穩當であるミ、私は考へるのであります。圖面を見ますミ、大體その時代ミいひ、その筆蹟ミいひ、總ての點からかく歸納せられる譯であります。さう降つた時代に作られたものではなく、世界圖は三百年前に作られ、日本圖は百年遅れて作られたミいふやうなことはありません。大體同じ時代であります。ミころが、その世界圖ミにも日本圖を見ますミ、例へば會場に出てをります若狹發心寺の分の日本圖を御覽になるミ、あれは一體原圖は何によつたかミ申しますミ、室町時代に纂輯された拾芥抄ミいふ本に、日本の地圖がありまして、それに行基作、行基菩薩がこの圖を作つたミいふ風に書いてあります。發心寺の分はそれミは位置を少し違へて、行基の日本圖が逆立をして逆になつてをる、南を上にして北を下にして居ります。最もこの型の地圖は



(藏所寺心發 町設小狹若) 風屏圖本日圖四第

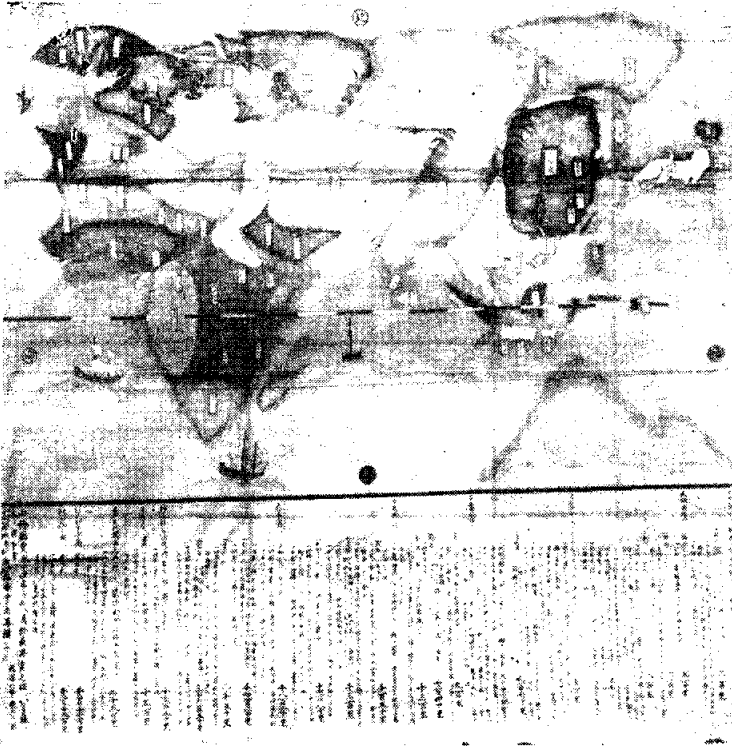
鎌倉時代に出来た洛西仁和寺嘉元二年古寫圖なども同じであります。然し何れにしましても、それは無論行基圖ではなく、もつと新しい、先づ平安朝以後のもので、その證據には——行基は奈良朝であります。あの圖を見るに、日本の八道は皆んな山城から出てをる、奈良朝ならばそんなとはない筈であります。ところがその行基圖といふものが、日本の地圖としてはその後大して進歩しないで、矢張りこの時代に傳はつて來たのであります。しかしその圖を今度は航海圖、又は世界圖の中にある日本圖と比べるに、さすがにそこは日本が本家だけあつて、幾らか格好がよくゐる、とにかく四國も九州もあり、本土には奥州も出羽もあつて、奥州出羽らしいところにちやんと坐つてをります。ところが外國の圖にあるものは如何にも怪しいもので、そんなに合理的な日本圖ではありません。そこで矢張り世界圖の片雙には、これまで慣用せられてゐた日本圖を用ひた。かういふことがいへると思ひます。

序でに、この日本圖の世界地圖の上における位置を申します。マルコポーロが日本といふものを歐羅巴に紹介してからこの方、段々刺戟せられて日本圖は世界圖の一部分として形を現はすようになりました。例へばその中でも最も古いものとしては應仁文明の亂があつた文明六年一千四百七十四年にトスカネリ (Toscanelli) が世界圖を作つた中にジバング (Cipangu) といふのが日本の位置に示されて居ります。——もつとも格好はメチャクでありますが——其後百年経つて一千五百七十年我元龜元年のオルテリウスの世界圖の中にもジヤバンといふのがあつて、だんく位置がよくなつて來て居ります。それから慶長三年エダムで作られた前述帝

室博物館所藏の南洋鐵路圖の中にも、矢張りジャバム(Java)といふ名前で出てをりますが、北方の部分は全く判らない海鼠の頭見たいに書いてあります。そんな風で各國の航海圖などにありましても、日本の輪廓はなつてゐないのでありますが、たゞ末吉或は角屋などで使つてをった航海圖は流石に日本人が使用してをったものと見えて、日本のところだけは行基圖を参照したと思はれる位に、格好を直して入れてあります。だから博物館の圖に末吉などの圖に比べて見ますと末吉の方が日本の圖の姿勢がよぶよくなつてをりまして時代が後かも知れませんが、一體に日本人が常用してをったから、日本のところだけ作り換へたといふ風に考へることが出来るかと思はれます。そんな風にしまして、屏風圖の日本圖は、元來これまで傳はつた行基圖を使つたものと思へられるのでありますが、も一つ面白いとは、福井市淨得寺の地圖の日本の分を見ますと、各國の國名、或は郡の數、高の數が詳しく書きこんである。これは別に珍らしいことではありませんが、九州の方に一寸注意すべき點があります。それは九州に限りまして、博多とか名越或は長崎といふやうな地名が書入れてあり、特に大きな島ではないけれども平戸の島、天草の島が丁寧に記されて居ります。斯様なところが何故特別に書かれたかといふことは考へる人によつていろいろ見地は違ふかも知れませんが、少くとも平戸、長崎は南蠻との往來、また名越が隔つこの方の小さい場所であるに係はらず鮮明な一つの大きな丸でもつて塗られてあるとは、さうしても文祿、慶長の役に關係があることを考へられます。さうして筑前の方から西に走つてゐる街道は名越に結びつけられ、またその道は直ちに玄海を渡つて壹岐、對馬に結びつけられ、それから釜山の方へ連つてをります。さういふことを考へますと、その圖は文祿、慶長の役の後あまり遠くない時代のものだといふことを考へても、あまり不都合はなからうと存じます。それから對馬の世界圖の分で高麗のずつち北の方——今の間島地方であります——加藤清正が朝鮮征伐の際に、二王子を追つて遠く北の方へ行つたことによつて、日本人に新しき記憶を與へたところの元良哈が見えてゐることを考へます。ますますこの屏風の製作は、朝鮮役の後世間の人があまり注意を逸しない時代に作られたことを、はつきり考へしめることが出来るかと思ひます。

附載文書との關係

もう一つは屏風に附いた言葉書から、何か一つの引つか、りはないか、かう考へます。その製作時代が何時といふをきつぱり書いたものではありませんが、しかし前にいつた家光將軍が枕屏風に使つてゐたといふ北村氏の分には一通の文書が附いてをります。寛文三年でありますから少し後になりますが、同年四月幕府はその屏風三双等を、在日光棉佐兵衛に渡すべき由を各宿驛中に達示したものがあります。それは家光將軍薨去後その遺品をいろいろ分配しました中に、生前寵愛してをつた、堀佐兵衛に、遺愛品の世界圖と日本圖の屏風を下賜されたのでありまして、それを子孫が宝物にして保存し、それを轉々して北村氏に傳へてゐる、かういふ譯で實際の物を見ます。彩色襖圖の具合が非常に立派で、如何にも家光將軍が使つてゐたといふのが、嘘でないことを、直覺的に示すやうであります。また日本圖の部分なごは、家光が寢室に使用して、あの大名をこつちへやつたらごうかなと考へる材料として使用したと思はれるもので、如何にも國境といひ城廓といひ石高といひ、一目見ればごの大名の配置がごうなつてをるといふことが、はつきり判るやうに書いてあつて、これはその附屬してをる文書からも、家光のものであつたといふことに歸納する。ごが出来得やうかご存じます。また北村氏のいひ傳へによりまして、それは家光が家康所用の地圖を買つて、自分が模寫させて枕屏風にしたいといふ風にいはれてをりますので、ますますその傳説を確かにするものであります。ごが猶ほ一つ面白いとは、今度の展覽會において偶然一つの發見が出来ました。それは家光將軍は祖父家康の氣象を受けて、頗る英邁な將軍でありましたが、その家光が自ら使臣を長崎に馳せて世界圖を寫しつた一つの證據が出て來たのであります。それは、參州田原藩の鷹見爽鳩（泉石）——渡邊華山なごの師匠で、その頃の學者に隨分影響を與へた先覺者であります——この人の持つて居た遺品の一つに、世界圖屏風の影寫があります。即ちこれ（演壇上に掲示す）であります。型も小さくあまりいゝ出来ではありませんが、こゝにちよつと言葉書があります。「寛永十四年丁丑八月於長崎書之、但公方様へ上り候下書」を書いてあり、またその次に「元祿四未歲孟春中旬再び模寫之」とし、また三番目の但書に「天保七申晚春寫」を註書してあります。この三番目が即ち鷹見氏の書入れて、寛永十四年八月長崎で將軍家光の仰せで書き、また



（藏所氏館太久見鷹 縣葉千） 幅圖界世寫摸石泉見鷹 圖 五 第

元祿に寫された、それを鷹見泉石は寫した。即ち元は寛永十四年八月に作られたもので、恰度島原の亂が起つた直ぐ前であります。その時家光將軍は確かに長崎に人を遣つて之を影寫せしめたので、これは泉石の寫したものでありますから天保時代であるが、原本は長崎で寫させたことが判ります。これに非常に關係のあるのは、前申した能登の總持寺別院所藏南膳部世界圖幅であります、長崎の啗台寺——いはゆるキリシタン寺を潰して其跡へ建てた——から、その本寺能登總持寺へ持つて來たといはれるものであります、もう一つ面白いには總持寺の分にもまたこの分にも、こゝに附録文言があります。總持寺の分を見ます、こゝに「日本長崎異國渡海之港口船路積」ミ書

いてあります。これはつまり長崎から貿易に出かけて行く土地、支那の南京、福州、漳州、天川、多加佐古といふやうなところから初めましてゴハ、ブルネルなど、それからエンゲレス、オランダ迄二十一ヶ所を書き並べて、その航海里數と貿易の品物、さういふものを一々詳しく書いたもので、これにも書いてあります通り、例へばまんえひらの條に「蘇木、白砂糖、水牛之角、葡萄酒」こんな風に列記してゐるのであります。ところがこれには他に何か相對照するものはないかといひますと、ちやうど寛永十四年八月——これを寫した時と同じであります——に出來たところの洋記（異國渡海船積）といふ本がありまして、これによほゞ似てゐます——少しの出入はありますが——さうして見るに、つまり此等はいろ／＼實際當時の貿易に必要な項目を書いたものでありまして、少なくとも寛永十四年の八月にはちやんと出來てゐてさうしてかういふ屏風の上の方の國名と、相對照して書かれたといふことがいひ得るのであります。即ち寛永十四年前後に出來たものは、長崎がその原本を作つた場所だといふことが云へるのであります。

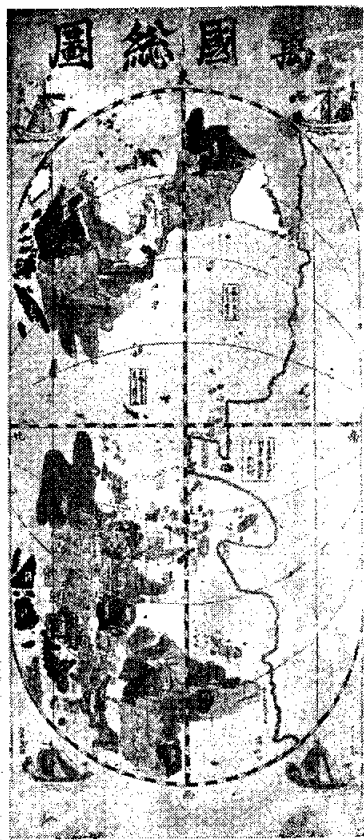
結語

さういふ風に考へまして、さういふ風に申しましたとを約めて申しますと、この世界圖屏風といふものは、慶長の初年から支那およびヨーロッパにおいて、かなりに世界圖が刊行せられた、さういふものが日本に舶載せられて長崎等にもたらされ、だんだんそれが幕府の方にも納められたのでありませうし、いろいろの方面に傳はつたのでありませうが、かういふものを本として屏風圖に製作せられ、それに地名或はその他の記事が日本流に書入れられて、あるものは實用的に重きを置かれ、あるものは裝飾的に重きを置かれるものとなつた。また好んで日本圖と對をするものが出來て來たといふことが出来るのでありませう。その製作年代について申しますと、確實に申すべきものはありませんが、私の考へでは、一番古いものは慶長の末年ごろに擬すべきもので、その中の裝飾的分子の勝つたものでは、福井市淨得寺のものを首にすべきでありませう。その淨得寺の分は、福井藩の海港であつた三國に於ける、非常に古い豪商の内田といふ家から、幕末頃に寺へ施入せられたもので、その内田家は福井松平侯の御用商人であつて、その關係から松平家から出たものと思はれます。松平家は先祖は秀康で、家康の嫡男として、爾來藩は御三家に次いで幕府と密接な關係がありましたから、或

寫したものでありますが、これは能登の總持寺別院の分ミ相對するもので、他にも慶長から少し飛んで寛永十四年前後、



(藏所氏館三長田前 市堺)



圖物人國諸に並圖總國萬 圖六第

は同家は幕府から之を得たものではないかとも思はれます。實にその裝飾的部分の立派なこは列擧した各屏風を遙に抜いてをります。それから實用的に申しましたものでは堺市の山本氏の分が一番古いもので、即ち矢張りその頃のものではなからうかミ存じます。また家光の枕屏風ミ稱するものも、矢張り慶長末から寛永初年に擬すべきものと思ひます。また次に前申した如く、はつきりその製作地の判つたころの、寛永十四年長崎で

その時代にはよほど盛んに作られたと思ひます。その後暫くするに正保二年或は四年——少し干支の工合が悪くて、こちらにも判りかねますが、銘文に「正保丁酉季春吉辰於肥州彼杵郡長崎津開版」と記され、長崎において各國人物圖繪をつけて、萬國總圖がはじめて版行せられてをります。この圖は堺市前田氏の所藏であります。之は筆で書かれたのではなく、版になつて出てをります。その圖様をよく見ますと、屏風圖の系統を引いてをることは少しの疑ひもございません。一方に各國人物の繪があり、一方の方に萬國總圖としてあります。これは屏風圖と同じ系統のものが版になつたものと思へる。ここができるのであります。

以上は大體地圖の屏風についての考察であります。その次ぎに南蠻屏風につきまして大體の觀察を、與へられました時間の許す限り申して見たいと思ひます。

南蠻人渡來圖屏風

主なる南蠻屏風

倍この南蠻人渡來圖屏風に申すものは、これは世界圖屏風にともに、考へやうによりましてそれ以上——世界圖屏風よりもより多く、今日なほ各地に残つてをりはせなから思はれる程に盛んに製作せられ、流行してをつたものこそ考へられるのであります。この南蠻屏風は、定めて陳列會場で幾種類も御覽になつたこと、存じますが、これは世界圖とは違つて、全く純粹な繪畫であります。先づ風俗畫の一として見るべきものでありまして、しかもこの題材は實に當時の日本人として新奇なものであり、この取扱つてをることの事々物々は、よほど珍しいものであつたに相違ないのであります。世界圖よりもつゝ如實に好尚を示して呉れる繪畫として、時好に投じたといふことがきやうと思ひます。前例によりまして、今日ごんものが各地に残つてゐるかといふことを列舉して見たいと思ひます。然しこれは單に私が見たものばかりでありますから、諸君のうちで他に所藏のものを御承知の方が必ずあると存じますから、機會を得て色々御報告を願ひたいと存じます。

まづ第一に擧ぐべきは、今日會場にも出てをりまする帝室の御物であります。この帝室御物の御屏風は元靜岡（駿府）來迎院のもので、徳川家康が寄附したものだといつてをります。それが明治になつてから徳川公爵の手に歸し、その徳川公爵から帝室へ献上せられたものであります。二番目にはこれと類を同じくする大津市大谷派別院の持つてゐるものがあります。これも徳川家康の拜領といふことになつてをる屏風であります。その次には山形縣西村山郡の佐藤氏の所蔵品でこれは元仙台藩の片倉家の傳來であつたといつてゐます。四番目には同じく山形縣佐伯氏の所蔵品があります。之は元山形の最上家のものであつて、最上家が徳川幕府の初めに領地督をさせられて近江へ移りました、その最後の主人であつた最上義俊が描いたもので、それをその土地の寶鐸寺へ施入し、その寺が廢せられてから今の所有主に移つたといふはれてをります。それから五番目には會場に出てをりまする京都市の矢代氏のもの、六番目には越中高岡市の岡本氏のもの、七番目には兵庫縣の河本氏のもの、これも會場に出てをります。内膳筆といふ署名があります。八番目には東京市の渡邊氏の所蔵せられた屏風でありますが、これは大正十二年に燬失してしまひました。幸ひに完全な寫眞が残されてをりまして全景が判るのであります。その一部分の模寫圖を堺市役所が持つてをります。このところ（講演會場）にあるのがその一部分の描寫圖であります。實際のものはモットその畫面が廣かつたのであります。それから九番目にはこれも會場に出てゐます東京市の益田男爵の所蔵品、これはいひ傳へによりまして住吉如慶の描いたものだといふことであります。十番目には東京帝室博物館の藏品。十一番目に奈良縣の室生寺のもの、それから同じく十二番に唐招提寺のもの。十三番に大阪府吹田町の高橋氏のもの、これも第一會場にあります。十四番に岡崎市の圖書館所蔵品、これは高島屋（開國文化展第三會場）に出てをります。志賀重昂氏の舊藏であつたといふことあります。十五番目には富山縣の吉野氏のもの、十六番に奈良縣の平井氏のもの、まだ此外にもありませんが、先づそれくらゐにしておきまして本題に入りたいと思ひます。

題材構圖の大様

而してこれを全體を通じて見ますと、畫面の題材と構圖とは、必ずしも一樣ではないのであります。これは地圖と違つて自由に描寫されるために、恰好が皆一樣に似てゐるといふわけには參らないのであります。



(蔵所院別東 市津大) 風屏圖來渡人蠻南 圖七第

然し見やうによつては共通の點も非常に多いのであります。何しろ當時南蠻人の渡來によつて、日本人が最も注目し驚きの眼を睜つた題材を取扱つたものでありますから、やはり共通の點があるのであります。まづその點から畫面の大體を申しますと、南蠻船が着岸してゐる、さうする商人が異様な粧ひをして街路を行進してゐる、或は黒ん坊がゐる、或は飾傘を翳された中に船長らしきものが威嚴を示して緩歩してゐる、また堆き貨物を荷揚げしてゐるところを、珍し氣に眺めてゐる港の男女がある、また日本人の店先における南蠻人の取引を示したところがある、これらは専ら通商の方の光景であります、これに對して宗教の方を題目とする場面があります。それは主として宣教師の動作が現はしてあります。宣教師も申しましていろいろに分れて

居りまして、當時少くも四派の宣教師が、日本に入り込んでゐたのでありますが、一部の日本人としては割合に最も長く見慣れてゐるのは、ジェスエツトの風俗であります。天正十八年にサビエル聖人がやつて來て以來、引續いて渡來した黒く長い法服をまきふたジェスエツトの風俗であります。長い筒のやうな黒い着物を垂れて、そしてその下に白い下者を見せて、黒いビレッタ（僧帽）を被つた坊さんが、一番多く畫面に出てをります。最も多く日本人に親しまれたこゝが判ります。慶長十九年七月家康が、大舉してキリシタンを追放しました際に、日本にをつた宣教師はジェスエツトが主でありましたが、なほまたその外にフランシスカンがあり、ドミニカンがをり、オグステニヤンがをり、つまり四派があつたのであります。然しジェスエツトは天文のはじめから文祿の末まで、約半世紀間絶えず渡來してゐたのであります。それから漸くほかの三派がやつて來たもので、さうしてもジェスエツトが代表的に見られてゐました。此等の宣教師を主人公として寺院があります。又寺院の門があり、建物の中には或は長い廊下を混へたものもあり、十字架をのせた建物もあり、そして内部にはキリストの像を安置して、之を禮拜してゐる所がある。マア一般の共通した主題はそんなものであります。然し亦それとは全く構圖の違つたものもあります。即ち通商宗教にはあまり直接關係のない餘興的の畫面で、一種の演戲圖でもいふべきものであります。いろいろの踊りをやつてをる。日本に當時流行した風俗畫——踊り手の中に南蠻人も混つて踊つてゐるこゝにふ風なものもござります。また通商の場面だけで宗教的の題材を少しも混へてないものもあります。

傳來と筆者 次に一體此等屏風畫の作製された時代は、いつ頃であるかといふ點を考へて見ます。こゝ、此等の畫面の上におきまして、餘程珍らしい材料があらゝちに見えてをります。やはりこのうちには、日本人の風俗をいたしましてこの當時の風俗畫のうちには、種々出てくるこゝろの三味線であるか、或は煙管であるか、その當時流行し出して來た新しい器具なきが描かれてあります。かういふものを特に注意してチャンと描いてあります。それらのものから賦彩の工合、或は描法なきをいろいろ綜合して考へます。誰れにでも識別せられるやうな模寫は別として、その作はいづ

れも慶長あたりから寛永邊りを下るものではないといふことが、まづ豫知されるわけであります。そしてまた一番興味の
あることは、前述の如く徳川家康から出てをるいふことを傳へてをります。ここでこれを世界圖と同じやうにモウ一遍繰
返しまして、信長や秀吉頃にはどうであつたかといふことを調べてみます。いろいろ考察の結果、その時代には、まだ
この種の屏風は、そんなに作られてゐたとは思はれません。矢張大體は徳川家康の時代に至つて、漸次製作されたといふ
證據が出て參つてをるのであります。

次に筆者を知るべきものとして、これも一向見當はつきませんが、河本氏所藏のものを見ます。この裾の方
に内膳筆と書いてあります。これはいろいろ考へて見ます。この狩野内膳の描いたものといふものには、斯の豐國祭禮
圖の如き確かなものはいくらもあるのでありますから、さういふものと較べて見てその特色は判りますが、さういふとは
別問題として、單に署名から見なしてもこれは内膳ではありませぬ。恐らく落款は後人が加筆したものでありませう。
益田男爵のものは傳住吉如慶と云ふてありますが、これは落款はないので確には判りませんが、書風は或はそれに近い
ものであるといふことが云へると思ふのであります。しかしそれにしても慶長よりは無論下るべきものであります。つま
り時代を可なり引下げなければならぬものであります。また先に申しました渡邊氏のものは、岩佐又兵衛の筆といつてを
りますが、これは書風が似てゐるから、漫然さういふことをいつてをるのであり、御物の屏風——もこの靜岡の來迎院の
屏風の如きも、寺記に土佐繪の屏風と書き留められてありまして、つまり土佐風の繪といふことだと思ひますが、確實な
筆者は判らないのであります。況んや山形の佐伯氏のものを最上義俊が描いたといふことは、確かに判らぬのでありま
す。つまり文獻的に見て——署名などから見て確かに誰れが描いたかといふことは判るものはないのであります。

製作年代の假定、こゝにおいて只年代を推定する一つの方便として、屏風の畫中に描寫せられてある宗教的の題
材から考へまして、製作年代を假定してみたいと思ひます。この南蠻屏風の研究者として知られたヨセフ・ダールマン
(Joseph Dahmann) 氏の發表せられた説には、一應傾聴するに足るものがあります。試みに曾てその史學會での講演筆

記録

Joseph Dahmann:—The Earliest Intercourse of Japan with the West as Represented by

Contemporary monuments of Japanese art. (1542—1614) 史學雜誌三十四卷第一號

の一節を引いて見まするに、同氏は屏風畫中キリシタン關係の題材が頗る多い點から、かくの如き光景は數千の日本人が法王を首長とする天主教に加入した自由交通時代を描いたものであつて、一千六百十四年——慶長十九年以後に於ては、日本の畫家がこの國民と西洋人、殊に禁止せられたバレンシの交通を題して畫を描くことは出来なかつたであらうとして慶長十九年以前のものに考へ、また「畫中の宣教師の多少はともかくとして、布教四派のもの悉く描かれた點よりして、一千六百年（慶長五年）以後ならん」といつてゐるので、即ちその取扱はれた數双の屏風中標準となるものは、慶長五年乃至慶長十九年の間に作られたものであらうといつてゐるのであります。然しこれは一應傾聴すべき見解ではあります、實際現存する道品を見ますに——單に今日會場に出てゐるものだけを見ましても、慶長十九年までに、これ等のものが出来たといふことは考へられないのであります。さうしてもモウ少しあへ下げるべきものがあるに考へるのであります。なる程慶長十九年家康の禁教といふものは、随分手厳しいものでありまして、長崎にある目黒の十一の寺院を破壊させてしまひ、キリスト信者と思はれるものは、皆追放してしまつたといつてなりますが、その後寛永の鎖國が家光將軍によつて斷行せられるまではまだ餘勢が納つてはゐらなかつたので、キリシタンを題材とした斯かる屏風畫が禁止せられてゐるやうにはならなかつたと思はれますので、ダールマン氏の如く慶長十九年までに總てが出来たものはいへないと思ひます。私は最小限度において寛永鎖國までにそれを下してゐるものが可なりあると思ひます。少くとも大分あると思ひます。これは畫面の感じからも斯く考へられます。又一面鎖國——主としてキリシタン防遏の手段として斷行された鎖國以後には、國禁を犯して到底かゝる種類の繪畫が作製せられたことは想像するに出来ませんからその後に行るものも少いと思ひます。

想像と實寫

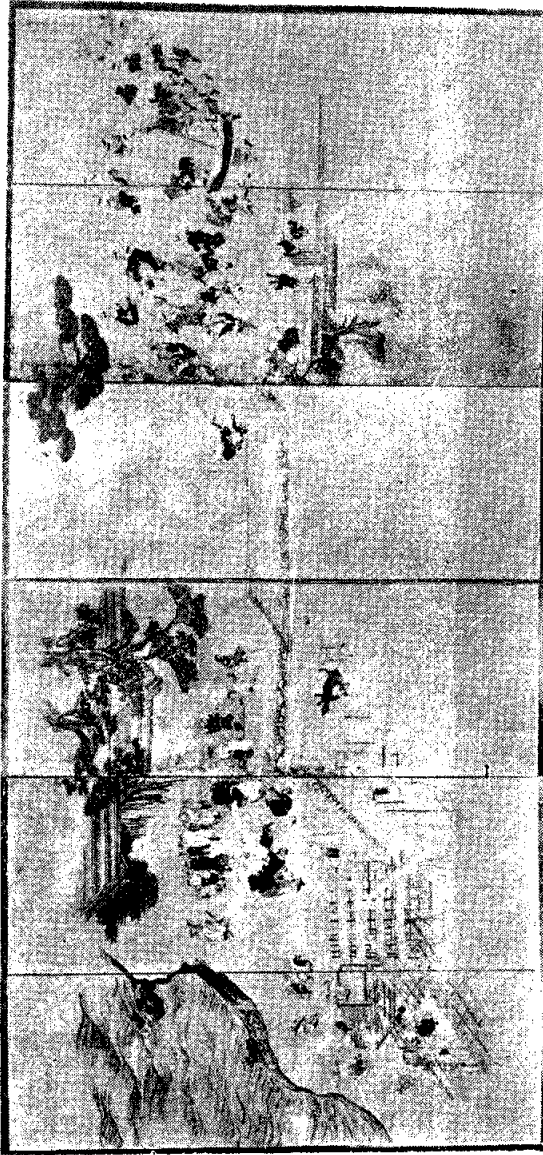
次にこの風俗畫といふものは、時代の好みと畫面の約束とを、畫家の立場からしてかなり想像的な光景として描いてゐるのであります。つまり想像的な光景を混へて畫面を構成したといふとは、容易に判るのであります。即ちそれを描いた人は、さういふとを考へてをつたかと言ひます、實際その當時接したキリシタンをはじめ、南蠻の商人などの持つて來るもの、それからまた動作、さういふものが非常に珍奇な感じを興へ、その印象を深くするものがあつたので、それを出来るだけ忠實に現はしたといふことは見逃せませんが、これと相まつて、又想像的なものを随分描かれてあります。

畫面の場所

まづそれを一つ／＼見て参ります、一番問題になるのはどこで作られたか、どこを背景にしたか云ふことであります。先づ益田男爵の所藏屏風、これは傳長崎の圖といふことになつて居ります。勿論屏風には別段書いてはないのでありますが、この屏風と最もその構圖に共通の點が多い東京市渡邊氏のものを比較して見ます。これは先記の如く既に焼失したのでありますが、その寫真によつて見ます、その屏風と、それから益田男が持つてをられるもの——比較的年代の新しい長崎の港といふ屏風とは、共通の點が非常に多いのであります。ところがその共通の點が多いものに對して、一方益田男の方では長崎だといふ傳へをもつてをり、渡邊氏の方では堺だといふ傳へになつて居るのです。

一方は長崎、一方は堺だといふ、それが共通の點が多いのだから、如何にも根據があやしくなつて來ます。當時にありましては勿論兩艘船は、どこへでも着いたわけではないのであります、平戸、大村、長崎が本土ではまあ堺であります。この堺の方につきましては、詳しくは申しませんが日本側の記録中正確なものには、堺に兩艘船が來たといふとは餘りないものであります。尤もこの來船は間違ひではない、確かに來たのであります、却つて外國の資料に之を證するものがあります。しかし何んといつても長崎が一番餘計に來てをりますので、その長崎を背景にしたものが多いといふとは勿論であります、唯渡邊氏舊藏品中堺だといふ根據は、その一部を模寫しました中に注意すべき點があるのであります。それは何かと申します、街區に接して直角に交はる溝渠を示せるものであります、普通の畫面には河や或はまた港口があ

つたりなきのでありますが、これには何か特徴のあるらしい一つの溝渠のやうに見られるものがあります。
 ミミロが御承知の如く、堀は當時自由都市の典型ミ致しまして、市街の三方を溝渠で取巻いてゐて、その中に市民が外
 敵を容易に亂入せしめるミなしに、平和な生活を得たのであります。尤も天正十四年には豊臣秀吉が自分で出馬して來
 て、平和時代には無用のものミしてそれをスツカリ埋めさせて居りますけれども、これは江戸時代の初めになつてすぐ再



（鎌倉氏御承知渡 市京東）

風屏圖本渡人變南 圖八第



(物 御) (分部) 風屏圖來渡人蠻南 圖 九 第

市東別院のものによりまして、それには一僧侶が教習堂の上の方で、

掘されて居りますから、今日猶堺を取り圍んでゐるのであります。それで堺の圖であるといふ根據にされてゐるのであります。しかも益田男のものになつて來ます、その溝が同じ位置で間違ひなき河になつてをります。のみならず先の方に奉行所めいたところが、南蠻人が伺候して居るところが描かれ、港口の様子などは如何にも堺といふよりは長崎らしく見えて居ります。さうしますと、一つの類似した構圖から長崎にも使ひ、堺にも使ふといふとになれば、根據が怪しくなつて參るので、こちらがこちらといふことは出來ないと思へるのであります。

宗教的題材の寫實

ところがそれはこれに致しまして、今度はこの屏風畫が非常に實寫の部分に富んでゐることを、證據立てる一番よい場面は宗教的の題材を取扱つた部分であります、御物を御覽になつても判りますが、大津聖像に對して禮拜してゐるところがあります。さ



（蔵所氏衛兵仁代矢 市都京） （分部） 風屏圖來渡人蠻南 圖 十 第

ういふクリストやマリヤの聖像は、洋畫の筆致を眞似まして、それがよく現はれて居ります。それはさうしても實寫しなければ出来ないと思はれるのでありまして、このこゝは御物の部分を御覽になつてもよく判るのであります。一體この宗教的の題材の部分は、實際のものを描いたさういふこゝが特によく判るやうでありまして和洋折衷になつてゐる寺院であります。か、寺院の廻廊或は門であるか、或はまた棟の上へもつていつて十字架を載せてある、第一會場の高橋氏のものにも東別院の分にも十字架が掲げてありますが、あゝいふ風なものゝ當時の記録によく一致してゐるのであります。慶長十九年七月破壊されて居ります長崎のキリスト教寺院、さういふものが多分、この寺の屏風畫の立派な手本になつたのではないかと思はれる節があります。こゝろが又會場に出てをります矢代氏の分、河本氏の分なごを御覽になります。すぐにお氣附になります。うが、屏風のうちに非常に宏壯を極めた圓塔、並びに尖塔なごが見えてゐます。これらは如何にも飛び



（設所院別東市津大） （分部）風屏圖來渡人蠻南 圖一十第

放れて、純歐洲風のものになつてをります。しかしてまた前の方にある大きな殿堂などは、支那風の非常な怪奇な屋根飾りが出来てゐます。或は龍の頭があつたり、蛇の首があつたりして、實に不可思議な屋根飾りをもつてをるのでこれは餘りに裝飾的に努めた結果、かういふ風になつたものと思はれ、少くも日本に於て實在したのではなかつたらうと思ふのであります。また通商を現はす部分にありまして、いろいろの貨物を陸へ揚げるころ、商人の行列などは、大體當時残された遺品に合致するのでありまして大津市東別院の屏風のうちにある碇船船中の生活、山形の佐藤氏にも船中の生活の圖がありまして、これらの屏風は、あまり年代を距つた時代ではないころに作られた末吉や、角倉の御朱印船圖の畫面よく類似してをります。

極端なる想像

然し猶以上の外にも、非常に想像的な部分があるのであります。なほ少しこれを申し述べて見ます。會場中にある高岡市岡本氏の屏風の如きに至ります。樓上にツツと並んで競馬を見てゐる南蠻婦人の一隊があります。大層澤山南蠻婦人が並んでゐる、或は競馬の



（藏所氏門衛右清本圖 市岡高） （分部）風屏圖來渡人蠻南 圖二十第

それには畫家の描き刷れた支那婦への服裝を収入れたものゝ如く、顔面の如きも男子はいくらか恰好もなつて居り、宣教師だゝが船長若しくは普通の商人なごの顔は、いろいろ變化を與へて描かれてゐるので特徴がありますが、婦人の方は丸で同じやうな顔をして、同じ服裝で觀光團然としてツツミ並んでをります。さういふものはどうも記録から見てもそんなに澤山の女がやつて來たさいふこはありませんし恐らく想像に過ぎないものと思



(表紙) 時勢圖 (正徳)

(中表) 南蠻屋敷 入道

圖川十

はれます。山形の佐藤氏の屏風畫面中、碇船中の南蠻船に商人がかたまつてゐる、そこへ日本の婦人が交つて興を助けるやうに寫眞では見られますが、この方が却つて實際であつたらしいと思はれます。南蠻婦人の圖は、猶矢代氏、河本氏のにもありますが、これらは同じく實際ではないと思ひます。

興味中心と變化を求むる畫面

また裝飾的な効果を一層増加せしめんために、通商及び宗教とは別の意味で、全然興味中心で畫面を變化させたものがあります。渡邊氏の舊藏のものを見ますと、かういふ畫面がある、大きな傘をさして日本人、朝鮮人、南蠻人、支那人など諸國の男女老若が港の途上にダンスをしてゐる、これは一方面から云ふと、當時諸外國人が相集つて交易をなし相交歡して、かくの如く楽しんでいふことに解釋ができないこともありませんが、しかしそれと共通點の多い益田男のものを見ますと、そんなに澤山は居ませんがやはり同じ個所に同一の姿勢で、ダンスをや

つてゐる南蠻人が見えてゐるのであります。それで益田男のものゝ渡邊氏のものゝは、ごちらがものゝ一方の現物がない以上判りませんが、ごちらにしても恐らく之は興味中心で描いたものでありまして他にそれは意味を有つものではないと思ふのであります。その例は他にもあるのでありまして、志賀重昂氏の舊藏品といはれてゐる岡崎市の圖書館のものは、樓上で南蠻人が一齊に踊つてをります。單に商賣にも宗教にも關係のない、たゞ踊るゝことが主題であります。それからまた、さきに申した高岡の岡本氏のものゝ競馬をやつてゐる、競馬或は調馬は當時大變流行したのであります。それをやつてゐるゝころがありまして、それを宣教師の連中や、或は貴婦人達が見てをります。また矢代氏のものゝを見ますゝ、商人達が海岸を調子外れに走つてをります、何か一大事が起つたやうに澤山のものゝ競走をしてをります、あゝいふものは別に他の意味はもたないのでありますが、畫面の變化を求め興味を導らした結果、かういふ風に圖を作つたものゝ考へます。あゝいふものを考へて見ますゝ、同時代に好んで作られてゐる或は豐國祭禮の圖でありますゝ、遊廊の圖でありますゝ、いろいろな群衆が出て新しい風俗を示してゐるゝいふやうな、風俗圖の屏風の趣向を軌を一にするもので、特に三味線なゝの新樂器がその中に混へてゐるゝいふことは、よほ面白と思ひます。

結 語

以上ゴタ／＼申したゝをまとめて申しますゝ、勿論一口に南蠻屏風を申しても、時代にも随分古いものもあり、また新しいものもあり、一樣ではありませんが、大體慶長頃から寛永鎖國ごろまでに出来たものゝ、私は申したいのであります。このうちには精粗巧拙、或は華麗素朴の別は、それは世界圖と同じく勿論ありますが大體はマアその時代のものゝ考へてゐるのであります。たゞこのうちで御物ゝ大津市の東別院のものゝは、構圖はいくらか違つてをりますが、然し系統筆者等は同じものゝ祭します。これゝ山形の佐藤氏および佐伯氏所持の分、これは恐らく同一系統のものであつて、外國人に對する興味を、通商の方面ゝ宗教の方面ゝに求め、素朴に表現したものゝ云ふゝことが出来るのであります。従つてこれ等は最も早い時代に出来たものゝいふゝことができます。矢代氏、岡本氏、岡本氏のものゝは非常に華麗になつて、餘程想像的な場面を混へて、嗜好に投ずる風が見えてをり、出来た時代がいくらか遅れてをり、またこの意味が

少し轉化して居ります、眞直に外來人の刺戟を受けた眼でもつて、素朴に通商方面と宗教方面とを描きつけたものに比較して、散漫になつてをります。

製作地

終りに畫面の背景は、さうしても矢張り大體は長崎あたりで作られたといふ風に考へるのが適當だと思ひます。こ申して必ずしも全部がさうだとは思ひませんが、しかしその場面はさうかといふことを考へますならば、それは長崎であるといふことをいつた方が安全であると思ひます。そして都なり江戸なりで然るべき畫家が、その圖様をもこにして世間の需要に應ぜしめたものだといふことが出来るこ考へます。

以上世界圖屏風と、南蠻圖屏風とについての題目から申します、モツモツ何か興味があるやうな話があるだらう。考へられた方があるかも知じませんが、私にこりましてはもこより専門外のこでありますし、殊に繪畫などは判らないので、たゞそれらの畫面に現はれた文獻的部分を引つづて來て、終りに傳説的材料を添加して、兎も角此位の範圍に於て、その出來た時代や製作さうこについて、一つの豫測を試みたつもりであります。定めて破綻の多いこ、存じますが、これくらゐにして御免を蒙ります。

昭和四年三月二十三日

昭和四年十一月十五日印刷
昭和四年十一月二十日發行

開國文化（定價二圓）

複製を許さず

著作兼發行
兼印刷人

大 道 弘 雄

大阪市北區中之島三丁目三番
地株式會社朝日新聞社

大阪市北區中之島三丁目三番
地株式會社朝日新聞社

印刷所

大阪朝日新聞發行所

發行所

大阪市北區中之島三丁目三番地

株式會社

朝日新聞社